



增補

文會市狀類大全

二十四孝經論解

完

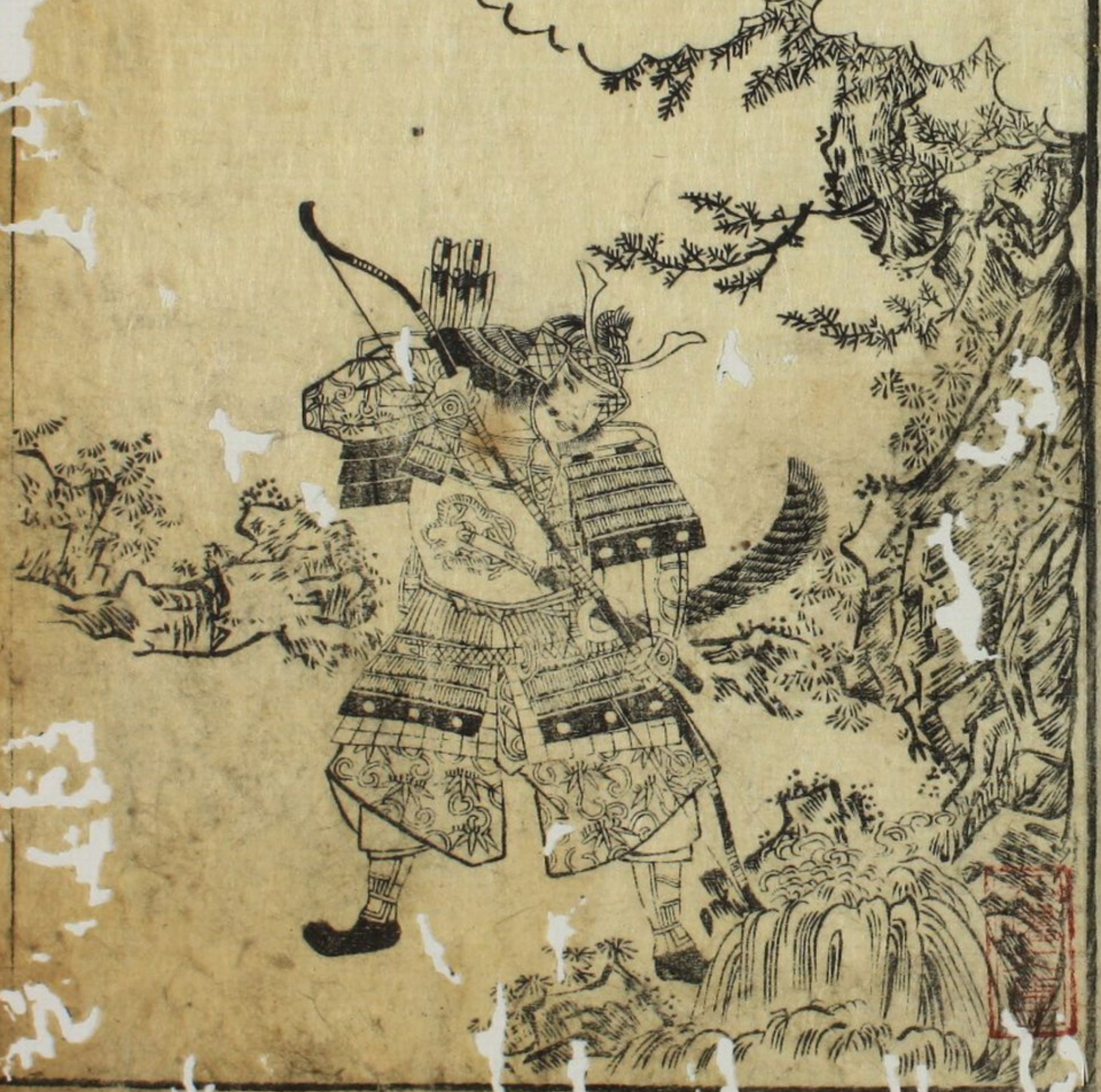


文會堂

天満宮御津代
 道安彦字をこ
 申奉る公十一歳に
 侍時父是長卿
 其高才を試み免
 寒夜の昌事成
 賦をこつたれハ
 所解小庭へ
 月夜如暗雪
 梅花似照星
 可憐金鏡轉
 庭と玉房聲
 流下 猶ハ
 天はさつこ
 春歌もむ
 一とかり



源頼義云良昭と我ハ
 あり一付炎蕪去のき
 かく徳卒水は湯と
 云自初念一活ひて
 弓猪とりのく巻と
 穿たもハ澧水漏
 出く徳卒の湯と
 資けと





今川俊頼の愚息
 仲秋制詞條々
 一不知文道而武乃終
 ふ切務利事
 一好鶴存古道五三書
 樂於生年

四才圖説



義家云自ら多とありあひ
 多痛く我ひあ耐よ安倍
 時任葛分ふ前と
 如潜く徳角と
 網てり杖を交わりと
 抱めふ武勇の頑目さまき

孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行...
 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行...
 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行...



漢文帝... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行...
 漢文帝... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行... 孝子... 孝行...

一 小遺之輩不遂此的
 一 今以死罪事
 一 大科之輩の具以有
 一 沙汰の者有免事
 一 貪食民金没例神社
 一 極重死罪

一 先祖之心法以下
 一 破壞莊私宅事
 一 君父之重身と忘却
 一 根忠孝事
 一 將公勢重私有不
 一 忌天道働事

一 冠と解ありと登
 夜に者病ましく
 事又釣りの位は
 とも月ら書こむ
 一 冠と解ありと登
 事又釣りの位は
 とも月ら書こむ
 一 冠と解ありと登
 事又釣りの位は
 とも月ら書こむ



曾参字子輿魯の
 武城の人孔子の
 弟子とす其の行
 子と人なり其考
 子とて孔子考
 子とて孔子考
 子とて孔子考

一 不辨 天下 為 德
 一 不心 責 國 封 奉
 一 我 心 知 臣 中 働 者
 一 又 不 為 國 花 奉
 一 企 自 乱 而 行 德 人
 一 愁 樂 身 奉

一 不 知 有 家 限 或
 一 道 分 或 奉 奉
 一 失 他 人 之 理 或 登
 一 印 養 者 指 威 奉
 一 嫌 賢 臣 也 後 人
 一 致 能 分 法 奉

一 孝人なりてんは
 母りてかきく受
 ても身参りまわり
 たりんよむせきり
 多し我よりよくわれ
 けりていひのとき
 能らばこそいひ
 なるよ山中より
 有る参りて心痛
 けりよ海をき母の
 声のよんりてなく
 参りと母をいひ
 るるよ参りて母
 の痛しなりり参
 りの痛しなりり
 参りの親と忘る
 休の老と感下あふ



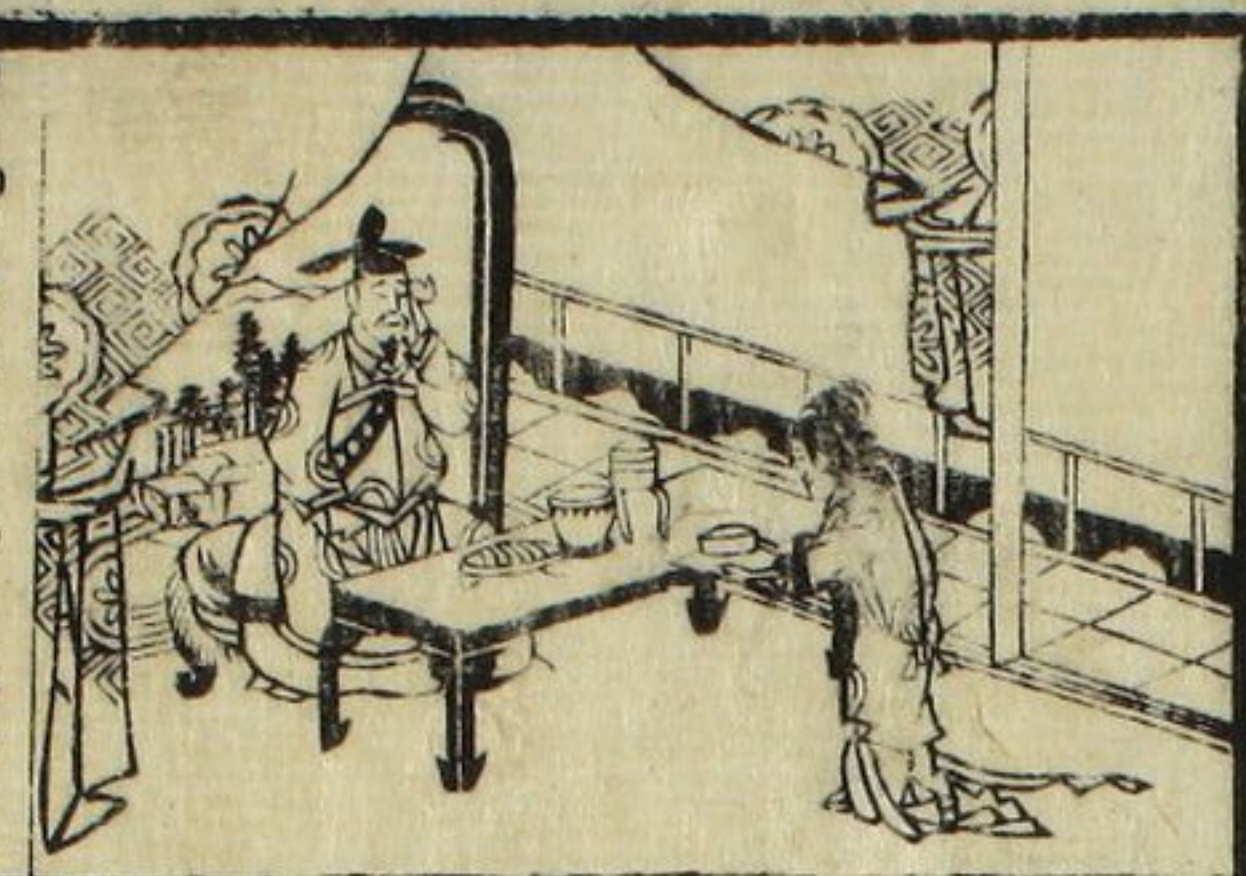
一 損子子雲孔子の
 けり子十哲の一人と
 考あるを孔子の
 考あるを孔子の
 母をこれら後母と
 けりていひのとき
 能らばこそいひ
 なるよ山中より
 有る参りて心痛
 けりよ海をき母の
 声のよんりてなく
 参りと母をいひ
 るるよ参りて母
 の痛しなりり参
 りの痛しなりり
 参りの親と忘る
 休の老と感下あふ

一 非たる言り美以属
 一 正路多ふ志煙霧更
 一 長酒宴遊具獨有
 一 良家不穢事
 一 迷已利根統可獲
 一 助作人車

一 一人来則掃塵病
 一 不能對面年
 一 好獨味不飲人
 一 隱居地年
 一 貧具衣家已る言
 一 戸下不見甚美

古犬

一 此家法也
 一 貴賤不
 一 乃理位安樂事
 一 於分國
 一 於性運



仲由字子路伯也
 其人有子好也
 一人あり分ありて
 人よつれをりて
 大加とて

有は陳と書法新の否
 金我情事武を道銘
 石を天法ゆ家本定
 下馬國更世事高志成
 以道も果事九煙其外
 軍事も形法道知の時

孝行を以て名を著せり
 積善の功を以て名を著せり
 孝行の功を以て名を著せり
 積善の功を以て名を著せり
 孝行の功を以て名を著せり
 積善の功を以て名を著せり
 孝行の功を以て名を著せり
 積善の功を以て名を著せり
 孝行の功を以て名を著せり
 積善の功を以て名を著せり



後漢董永字延年
 妻なく母を養ひ孝人
 といはれ父を養ふ孝
 心の味を以てせり父死
 して慕ひなき使わく
 日比備りて人の名
 となりて孝の功を著せり
 の孝とて人となし

乃心畢使初任家恩及
 丁有冰隨方求之為人德
 善忠友事親孝也
 古儀志也賢人會民國
 司名好任人會中德也
 知者心見其志也

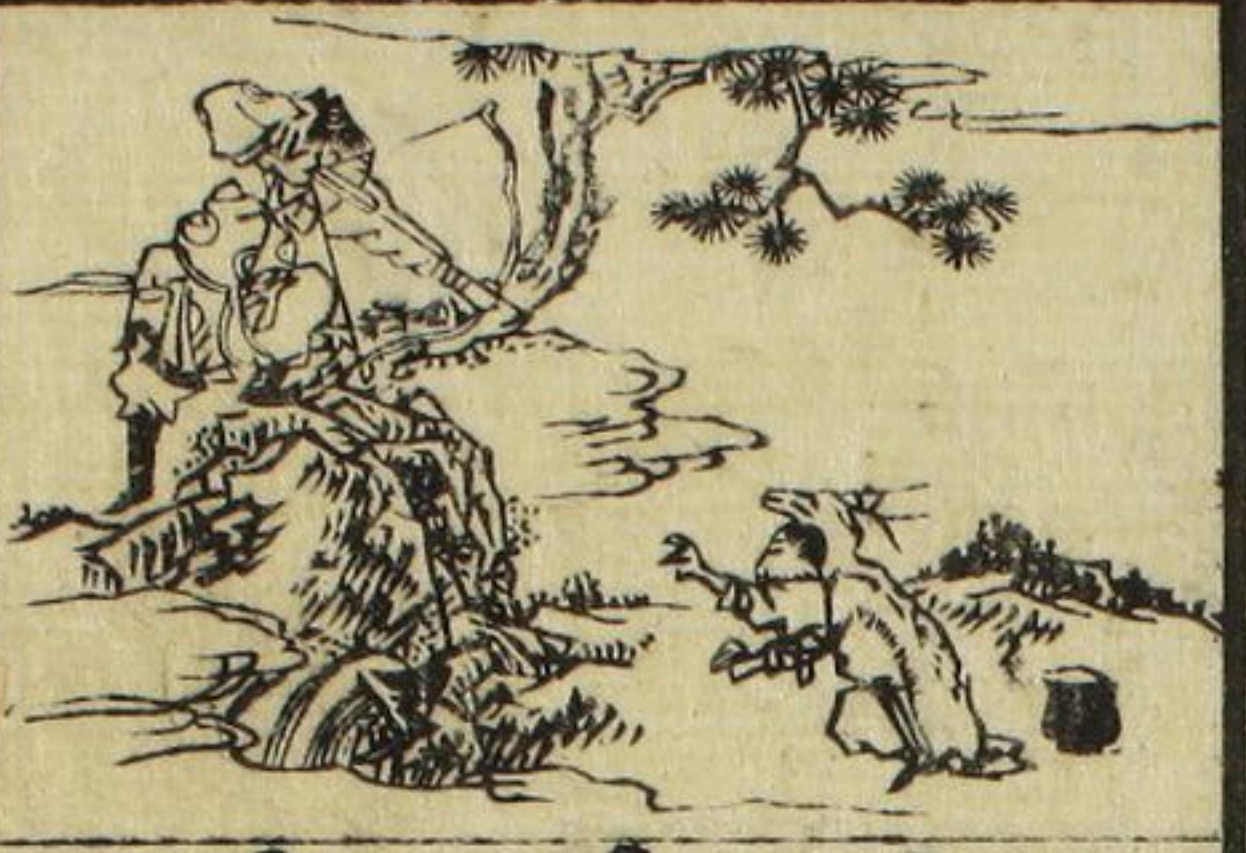
何如習事者之誠可知其
 聖是好德之友也好方德友
 志善人賢志也但初云是
 強勿撰人名也志善友相
 也限守一而初身也為人
 志及名也初身也為人

古狀

古狀

五

未幾其子の名を代
 とて完結人の事と
 して其の事とす
 一女子の過るる女
 子の事とす
 求の共よ人の事
 子なりとす
 言匹と撰たりん
 多の事とす
 是地の事とす
 夫の事とす
 地の事とす
 女の事とす
 帝の事とす
 債の事とす
 流の事とす



列子其名字代
 子なりとす
 父母老て眼を
 患ふる事とす
 療を施して其の
 疾を治す事とす
 汗を流して其の
 熱を去る事とす
 衣を着て其の
 身を暖む事とす

武士の家世人を教ふ所
 侍人の好人は名約多
 番地先之知我心を意と
 姓名は本在別の名世に
 依人徳を事実を謝色に
 可知也心名後同前成也

行まをて其の事とす
 忠又臣下無道之令民
 謀略軍師財を欲せ
 族の内中其の事とす
 門徒徒然其の事とす
 根屋上人年云其の事とす

古出

孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり
孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり
孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり



孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり
孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり
孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり

孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり
孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり
孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり

孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり
孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり
孝の碑 孝の碑は孝子の志を
示すものなり

古出

其貞と云母善
其のり世のりた
其のり世のりた
其のり世のりた
其のり世のりた
其のり世のりた
其のり世のりた
其のり世のりた
其のり世のりた
其のり世のりた



陸奥の
六歳の
時兵の
時兵の
時兵の
時兵の
時兵の
時兵の
時兵の
時兵の
時兵の

飛則其以汝汝有國
一遂之村才思不其
皇者貴其對の事
道之働操私用其馬乃
為用之木材持人教
以願其其法家之人

先規知行公治書相遠
依多人務振中感
也改生言知今義た
不願不持其其不
儀備之情其其也
其件

懐古の詞類と
 此の礼制たるを地
 蔵より老練の礼を
 其の骨節たるを
 へりかくる儀の事と
 其の礼儀たるを
 清くして思ふ所
 あり珍重とむべき
 事たるを其の
 母の松んたけあり
 とおちかくて其の
 嘉納するに油を
 人々知さるの考を
 て其の礼儀たるを
 天啓するに感とあり



懐古の詞類と
 此の礼制たるを地
 蔵より老練の礼を
 其の骨節たるを
 へりかくる儀の事と
 其の礼儀たるを
 清くして思ふ所
 あり珍重とむべき
 事たるを其の
 母の松んたけあり
 とおちかくて其の
 嘉納するに油を
 人々知さるの考を
 て其の礼儀たるを
 天啓するに感とあり

永享元年九月十日

初登山寺習教訓書

右の御書も本寺主人義也

其教訓の功也由是重宝也

之由也尚書士家瑞師也

志大物也此書地也

武也武也武也武也武也

武也武也武也武也武也

武也武也武也武也武也

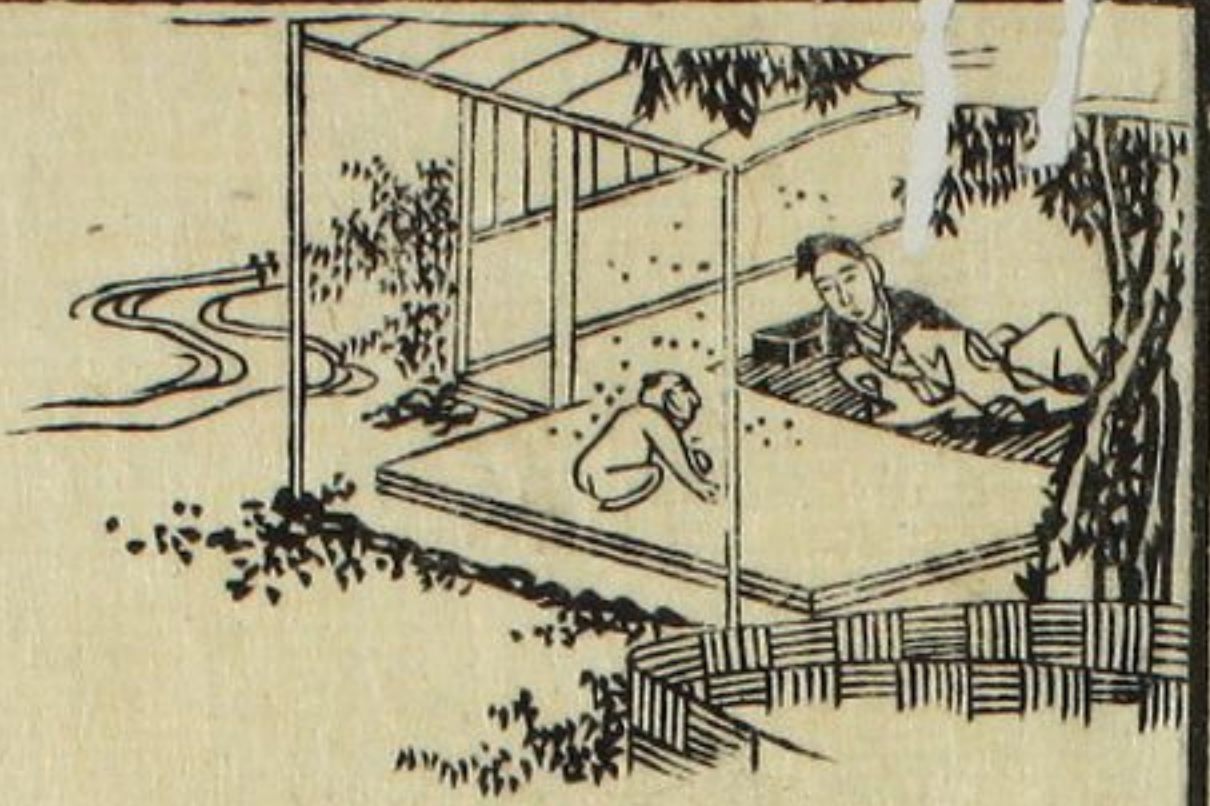
武也武也武也武也武也

武也武也武也武也武也

武也武也武也武也武也

古

後長子夫人病歿
 子孫皆貧乏ありて
 我が末子と合して
 終つてとてしる事
 海原まゝの家を以て
 其のまゝに居りて
 世に今般財を
 及ぶとてしる事
 と感涙を流し
 夫人と挨拶し
 子孫のまゝに
 人の善いと思ひ
 世に居りて
 終つてとてしる事
 終つてとてしる事



其の極つた代り
 此の八歳ありて
 此の名母たり其
 家貧く夏蚊帳を
 たつたはまけし
 父母の好まざる
 其のまゝに居り
 赤痢ありて
 終つてとてしる事

知つた非此等耳は
 汝持事長あつた
 来代り自道不事
 少人の中も本如
 物心等若く規道
 不初也依之まて
 知つた非此等耳は
 汝持事長あつた
 来代り自道不事
 少人の中も本如
 物心等若く規道
 不初也依之まて

口才知若くは
 貴之妻親合銀
 而汝若くは
 言者也若くは
 之等も其身に
 此等母も若くは

高天

天の物 ありて父
母と嘆くと由り也
父母は年老て血
氣もく我ゆく
と云ふらんが我を
くくハルそちひ
さる所のさへもた
ぬ中て群れを
うかして父母の友
花ゆんきんけい
まじり好まゆふり
あるハ歳とてかく
中で心とちる
けりかごくあはれ
かりり



朱朱朱七歳の子
父は少女と母を
考昌の母と考昌
より母と云ふこと
加しあひききてたれ
ずあはれ又又母
よりの考昌は
父はあはれは且

老年後悔亦知難
時不隨脚今忘親存
才不進下者深安字文
筆也虛心先如木以會玉
雲雲統統無筆亦尚其
女身慈想托而信可人

能信也之何又向辭陣武士
徒病身之世人貧疾之揚志
其世存之約をも神道経言
自然矣家先承其言直居
不若我言もに於能は他人
先途も進歩百人衆あり

誰か此の母を
父の無事後母の
源くちをひいていさ
もたすむと五年
と仰て高禄を
天子は我母
孝母といふは
おもしろ世子交
べつはとて方と
求るふかちして
は子をさういふ
母の勤七十余
なりてめり色
ろくの孝人の様



晋の王祥は休徵
天性の孝の人なり
母を養ふにも恨ま
ない共養有り父
母疾の所を養ふ
母の病を養ふ
湯茶も嘗味た
さるほど天のち

古状
書案に因事先故初學心
之由是書出入古詩經抱重
手以在書學之友書是抱重
又武二乃去揚為衆天下
頌德也海内身能德能
故有少上書其代為人

者是大睡以紙者心少
今之書法乃書能也
仍る教訓書也
腰紙状
漢義純多名上上言紙
漢撰出代官を二の初書是

古状

母生魚と食ふんを
 とりて水珠で魚を
 取らば使なきを歎
 池の底に魚を求む
 衣と雪を氷のうま
 氷と割るは其志の
 等感意も厚氷
 解て双魚解ゆら
 母又芙蓉の多葉
 入るを孝感の心
 和御の心秋葉あり



紅霞の影巨子
 秋葉の心老母
 其心は
 と悲し子
 こしを
 中とち
 巨あ母
 かん

似の歌歌
 会得て
 界外依
 初初
 初初
 紅波信

似の歌歌
 会得て
 界外依
 初初
 初初
 紅波信

古状
 十日

妻小福...
 して母...
 のま...
 して...
 母...
 我子...
 母...
 坑...
 天...



楊香...
 と...
 勿...
 入...
 父...

某國...
 亡父...
 誰人...
 妻...
 市...
 於...

東界...
 延...
 收...
 思...
 經...
 在...

古本

へき俊あつた新
 とあつた時ひらけ
 揚香年十五のころ
 父の丁おとす縁
 けしおとす縁を
 害父を助けんと
 虎の首飾り
 付くは虎のつて
 こそしやうをあら
 こり古の盛澤
 之孫秋一未とあ
 朱子孝子志と極
 獣も敵とるのつ
 りて天の擁護
 にまゝもあつた



庚辰毒公南條の内
 の人ありて病陵
 の会とあり十日も
 たりよつとまじ
 あり汗出るとこれ
 好の父の病よ
 附たまふとつと
 官棄ててあつた

藤上女民百姓は徳重慶
 史統魁高進月身家一族
 今上深少金定徳家重
 義仲後為首自伝事民家
 我之義重集後馬病敵
 願亡命成財海流大海流

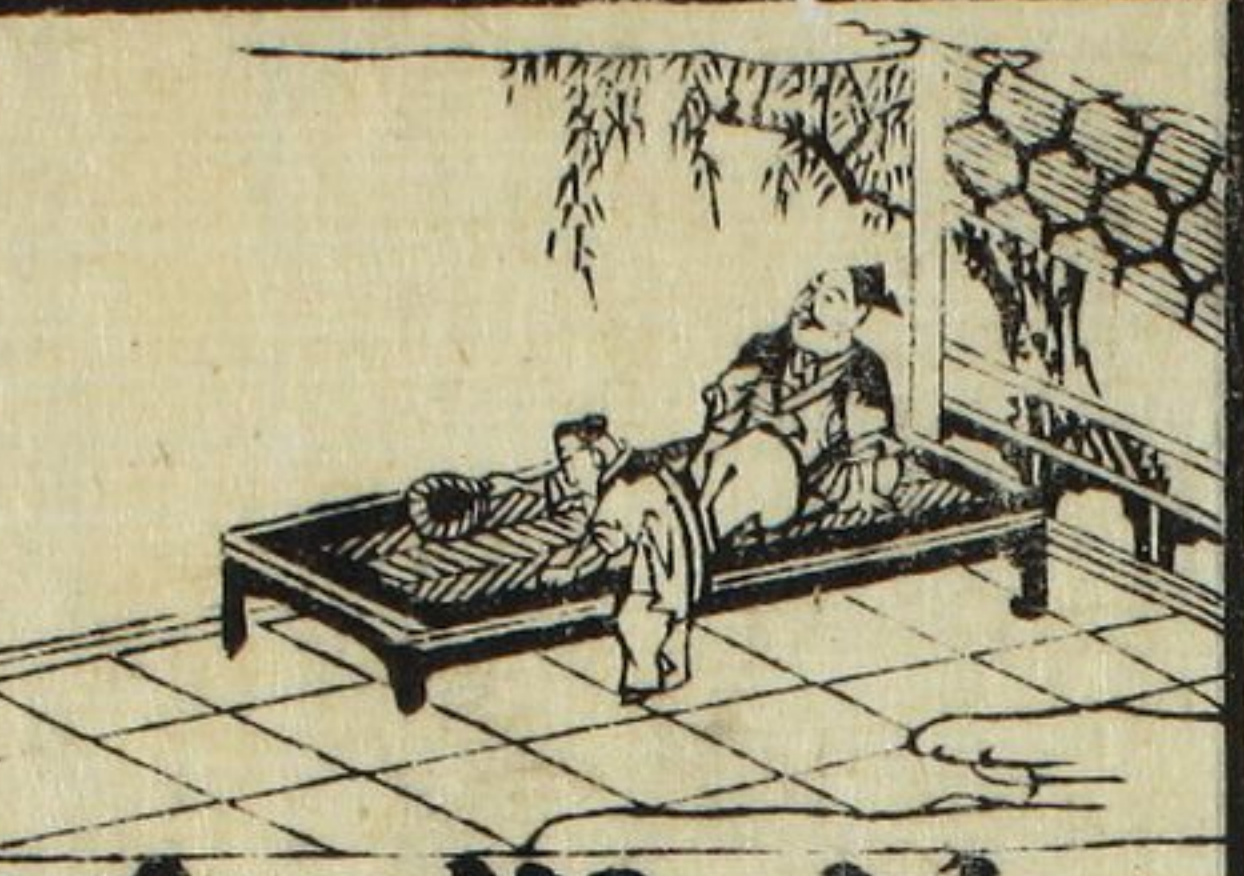
風波は秋不補流身海危
 抄鞍も棘親胆加ふの枕
 甲内月あり安の事ある中言候
 改年休亡徳重慶史
 傳の利あり徳重補任是
 耐之重由家と自傳

古大

古大

十一

其の如く果て
 父度前と兼ふ
 又の病を治す
 同は善くもあつて
 苦くもあつて
 心ひらくもあつて
 死の病もあつて
 已も善くもあつて



後漢の黄香字文海
 経典の善くもあつて
 九歳の時母を病む
 床を扇ぐ枕を涼
 一巻の書もあつて

善くもあつて
 父度前と兼ふ
 又の病を治す
 同は善くもあつて
 苦くもあつて
 心ひらくもあつて
 死の病もあつて
 已も善くもあつて

其の如く果て
 父度前と兼ふ
 又の病を治す
 同は善くもあつて
 苦くもあつて
 心ひらくもあつて
 死の病もあつて
 已も善くもあつて

唐又八家と過
 父年め妻の
 中五二三
 侍書
 其母世
 つて尚書令魏
 郡太守
 の黄瓊其子孫
 礼記温而夏清
 昏定而晨省矣
 黄香の如き也



後漢の善詩母
 又て善考
 龐氏也

子孫の先年未熟有以
 一幼女重く不長書綴係
 上省暇身存の位は重
 志は難
 之曆元正月後仲乙巳二月一日命年並退治
 比くは聖年治先而父治之年とあり年二月
 檀浦合歳年未七とあり父治元年有る也

義經會
 護身神義經末の賦法和
 出雲自然多由油何家
 法傳徳父清道與高栲名云
 遠國藤原氏氏月社
 徳田常家之山運法橋也

古大

母の家に... 父... 娘... 兄... 弟... 妹... 弟... 妹... 弟... 妹...



老萊子... 國の人... 己の... 父母... 我老... 思ひ...

和直之... 我... 海... 之... 根... 生... 海...

衣... 親... 弟... 弟... 弟... 弟...

占犬

おまれのついでに
 小園の衣とあてを
 さききひのなをれ
 としけり老るる
 おぼりて老るる
 時今にこそひて
 ちかちかたるれ
 尚の帰まのそ
 かくとあてのそ
 して父母の心を
 かくさめりるるの
 志のゆるさるる
 一 後蒙山
 耕他 老萊子
 と云書と老るる



後漢の蔡順字君仲
 父の病を治すに
 孝と尽きり王莽が
 兵乱をもちぎ飢饉
 一くは母の志の
 たるを堪えりるる
 其志をかりて

耶蘇キキキキキキ
 文彦案因日月九百

義經

進上流有無衛依殿

西塔自是坊新慶

最期書抄之一通

柳君年時実を以て
 鮮淵心月老秋味不替
 夜粗越河呼と一洗
 除繁安世以海向美
 俄志將抱取志を
 中得床佳探合作あ

占大

實の毒く毒く
 別して毒く
 赤眉の賊列
 すと同若
 母の毒
 未熟
 已余
 惡賊を孝
 トて
 行後
 其後
 威の奇
 威の奇



晋の王
 文帝
 其の
 向て

興義
 我母
 金積
 世世
 而今
 征夷
 將軍

子賢
 孫播
 鳳穿
 舊者
 江夜
 浦浪

古史

の墓の側より
 と造り給ふ
 信を植ふる
 と攀て父の墓
 へて死せるを
 かの心海迄
 相樹終る枯り
 又母存生の時
 雷と畏るる後
 ても父の心
 八重夜とて
 墓前より
 哀こそあり
 けり事あり



漢の丁蘭ハ
 母を喪ひ
 思慕の
 木を刻し
 造り事
 かの心海
 の樹を
 かなし
 かなし

嘗て在りて成礼は能く
 冠を冠して
 斧や鎌を
 実物より
 兵利は
 天子の
 用大
 相運
 九月一日

斤肉を
 氏有快
 教り軍
 刑罪有
 空天老
 張道
 辨作

古大

年の魚と
 我の魚と
 官の魚と
 親の魚と
 母の魚と
 筆の魚と
 孟の魚と
 竹の魚と
 天の魚と
 志の魚と
 つの魚と
 揚の魚と
 さの魚と



宋の黄庭堅
 直心
 知
 詩
 孝
 國

於初陳此
 宿財人
 刺魚
 我者
 勢大
 中軍
 武
 此
 厚
 芳
 探
 並

武
 此
 厚
 芳
 探
 並

古

廿

雨最急一昼夜
衣帯を解き盡
糸一合をまむ
しり大小便を
其意を漸く
ゆるぎでまわ
せしむるのこ
ゆいて甚孝んを
あつて ぼほわ
すこあれどもあ
号とつとらん
あつて平高
道を知りて
てはよあし

女孝幼進帳
夫佳次大熱
教主秋月派
涅槃靈光
長夜以首之
可憐人家中
頃希也世
名を尊號
聖旨を帝
寂聖妙人

天令幼子今然其衝子
三人依其故服在左
多相倚案事主
難云食案若人令
者道清治言快操
果統上回私不運
天令

女感波新行
高標林藤教
川林
頃將軍
女香
先

古犬

廿二

慕邪止河江
总取波卷玉
翻思常海徒
立夏應那仏
箇行雲霧匪
後可似雲霧
源劫を後國
一紙は錦書
取紫くし世
誇麗楽道

以筆欲今日我今一余揚爲
夏天卷作後代卷
有之通昭自放免意意格國
文作五年因日月在昔
能年狀
坐實能持人今我今事

本元教千
蓮花上平
攻余皆首級
赤大寺沙門
曾我狀
今月廿八日
於富士野之
得場之市陣
爲我今狀
同五郎時致

本念世若乃其乃後後排
奉旨懸丹之怒出神妙勝負
刻紙長紙額思迷物表爲部
本亦當後死後後事爲事爲
那卷不成深起道明能事
河津以地海流事家故事

古狀

廿六

巧謀致押若
也或法陣
伊豆國佐人
王叔在為尉
祐卿佐國
佐人佐備
王叔在為尉
云甚公弄
懷汝弟也仍
法謀致甚身

勢毛之妻也
其妻亦好
其妻亦好
其妻亦好
其妻亦好
其妻亦好
其妻亦好
其妻亦好
其妻亦好
其妻亦好
其妻亦好

佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木

佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木
佐佐木

有義大夫友
同盛狀
去晦日御
書今日旨
到來復
兄住作
小次郎
高信
今御
飛伯

結無海家悲部宿無之深
奉成爲敵害難然非緣
何宜切望死世由運有都
不到家式抽則及南獲
軍身弟故作差程也出矣
伏美家後少事其源完

及以吾判以
山使志可去
石以釋降房
去流人之間
不知以方作
召方及百進
之氏氏終
下馬山山
僕

以親奉不深
卷悲報悔
壽永三年二月八日
丹波重実
進上伊賀重平
經盛狀

六月
進上

振事年辰

本朝の書

帰命頂禮

八幡大菩薩

日域朝廷

中皇東世明

君の景祖

の身室作

の利奉生

三男入空

排新の格

飛多酒奉

功原有年相

國老後代

海軍礼万民

是を佛法

也者仲若生

今日有月... 振事年辰... 本朝の書... 帰命頂禮... 八幡大菩薩... 日域朝廷... 中皇東世明... 君の景祖... の身室作... 喜々... 事... 羅... 紀... 身... 今...

喜々... 事... 羅... 紀... 身... 今... 今月... 今月... 今月...

一政當臨
心取今一
舉旗戰場
絲之所
社權極威
熱的地
得我
深竹
和父

來清... 佛... 外... 云... 作... 夫... 然...

一政當臨
心取今一
舉旗戰場
絲之所
社權極威
熱的地
得我
深竹
和父

佛... 外... 云... 作... 夫... 然...

五

五

中義家傳附
牙家廟族
月號名於八
儀吉野家亂
以承其門
系志考後
致者仲のそ
清胤傾を
久今記此大
切登云如以嬰

秀其例之志者其酒者
廟之志海之志海者
波進例之志承承之志
自志志之志指波由難
筆筆波志志之志信信
秀其志志之志有有信信

車後強の國
為者起之
合の身わ亂
石起之志
至神威在免
憑非以亦伏
於冥加威
要亦勇決

悠谷次郎友
大坂伏
今乃乃行相市志業教
城志志之志志志志志
浪合志城用志其志志
定年秀其志志志志志

於一附通
 其方後則
 丹新才重
 其卷成加
 先使見一
 相平
 源安仲
 青坐二年
 育身百

痛健是入其河志受在江
 國東不務因日說漢列者地
 合戰切勝家出國為空進排
 諸軍執事多已了加生捕
 有田法部女國寺未法東地
 高舍塔之能得其刻刻

受の起信文
 教る中起信
 久之年
 上梵天帝教
 大天至始魔
 法王五道冥
 官素之府天
 下界地其外
 伊勢天皇
 皇亦實位

之廣大園秋地之有海
 傳者之助命高並以受
 却の企謀教其播種家
 若後之軍能進地城鐵烟
 唐宗感陽天法内統經
 馬堂乃出陣不即時踏

新報留書
同德寺之
合署山子
新身指在
國定家
心廣新松
尾奉聖總
日中固本
神祀世德
冥乃神民

補金書討
年信也
未此
神野
被
若也
大

秀秋別首事
也

長十九年

大野

同返狀

芳

雅
獨
天
教
份
一

楠正成金剛山
長問之壁書

一唯今日之事
らんを六万物
一類の理とあり
らるる万病を
一理とえく後と
思ふん
一人我の心海と
人よ捨らん事を
思ふへくす
一身とて一人
のうまひとまは

一上は道心と徳
一撥は人と儀を身
の非とありありと
一かとはまはり
内は邪心と貪心
一欲を厭ふてん
一怒は散乱と
一善と徳とを身
のおよす身の病
善とあり
悪あり
人の善悪を
よめる

運多しを中世其の國
秀見の智以刻秀教達を
極心以の細少の刻示候
表裏の侍衣代志多矣
長春の良秀頼宗死の
困歎然今又二府事合

不及是非の困歎の
只は勝切の口は笑ふ可
有月若蘭白叶天邊の
佛神の靈實の地事と
父子の初今上先帝の
一我も公怒の強云

考又長十九年
秀頼

沖泉堂
時泉堂主人書



己の形とありて
おのれを知らず
一徳と徳と時を
とてハ非とあり
一國のあはれ人並
一我のあはれと報
せんく云事なれ
一孫孫も毎日自
味あらず
一遊心も度及ば
一此の世の苦と
一此の世の苦と

廿四

寒露 節 九月 中	芒種 節 五月 中	立春 節 二月 中
霜降 節 十月 中	夏至 節 六月 中	雨水 節 二月 中
小雪 節 十一月 中	小暑 節 七月 中	驚蟄 節 三月 中
大雪 節 十二月 中	大暑 節 八月 中	春分 節 三月 中
冬至 節 十二月 中	立秋 節 八月 中	清明 節 四月 中
小寒 節 一月 中	處暑 節 七月 中	穀雨 節 四月 中
大寒 節 一月 中	白露 節 八月 中	立夏 節 五月 中
立春 節 二月 中	秋分 節 八月 中	小滿 節 五月 中

一海馬の馬、何れ
一先世守計あり
一幸の芳と其の子
一乃のく良
一太刀身の切を
一皆と他と好む
一禮儀の吉を良
一気毛を儲べし
一肉は佳しある
一と知るは
一あく却て不道
一教



立春
春
書
初
詩
歌

住辰今月歡無極
萬歲千秋樂未央
若代をわらふは
長生殿裏春秋富
不老日月遲
地福堅固満
天筆味合樂
池凍東頭風度解
窓梅北面雪封寒

文化九壬申三月再板
嘉永二己酉歲十月三刻
書林
江戸西國吉川町
山田佐助
北島順四郎

